
真・恋姫?無双 ～孫策伝～

金時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫？無双 ～孫策伝～

【Nコード】

N3435Z

【作者名】

金時

【あらすじ】

真・恋姫？無双の呉ルートで孫策が男だったらと言う妄想のもと書かれています。

不定期です。誤字があります。それでも言い方はよろしく願います。

ブローグ

月が映える漆黒の夜

月の明かりを頼りに、騎馬が1頭駆ける

「やべ、釣り熱中し過ぎた。」

そう呟く青年が一人

月明かりに照らされるその姿は、灰色の髪、紅いチャイナ服、服には狼の刺繍が縫われている。

「はあゝ冥琳の雷が落ちるな」

青年はその光景を思い浮かべ、思い浮かべたその光景の余りの恐ろしさに軽く身震いする

青年は少しでもその未来予知に等しい予想を少しでも回避するべく馬の速度を速めるべく腹を軽く蹴ろうとしたその時、月明かりしか頼るものがないはずの荒野が眩い光に包まれる

「なっ」

光はすぐに収まる

青年はいき나りの事に驚き興奮してしまった馬を宥める

荒野は再び静寂な荒野に包まれる

少し眼が眩んでしまっているが、すぐに慣れ辺りを見回す

離れたところに月明かりが跳ねかいら輝いている物が見える

青年はそれを見つけた瞬間口の端がつりあがる

そのまま何の迷いもなく近づいていく

近づくと倒れているのは青年の様だ

口の前に手を当てる

呼吸はしているので生きているようだ

次に服装に目が行く

遠目に光って見えていたのはこの服の様だ

ざっと青年の様子を確認し終わると乗ってきた馬の背に無造作に載せる

「これで、冥琳への言い訳が出来る」

青年の顔には何処となく安堵の色が見えていた

第1話（前書き）

駄文ですが楽しんでいただければ幸いです

第1話

「それで、なぜこんなに帰りが遅くなったんだ」

メガネを掛けた長身の知的な美人

世間では美周嬢と名高い周瑜公勤が問いかける

表情こそ微笑んでおり、はたから見れば見惚れてしまうほど美しいだが、微笑まれている孫策からしてみれば恐ろしいほどの圧迫感に襲われている

月はすでに天高く上り今が夜中であることを示している

そのことを艦が見て周瑜が内心では激しい炎が燃え盛っていることが分かる

良く見れば額に青筋も浮かんでいる

「み、見て分んないか？人助けだ！！」

男の意地だろうか

灰色髪的青年孫策伯符は若干及び腰になりながらも胸を張り言い放つ

その言葉に、周瑜は彼の乗っていた馬に無造作に載せられている青年に気付く

青年は未だに目を覚まさず様子は無い

周瑜はすぐに青年の衣服の異様さに気付く

青年の服は月の光を反射し淡い白い光を発している様に見える

形の良い眉が中心により、眉間に皺が出来る

思考は一瞬

溜息を吐き、眉間に入っていた力を抜く

後ろに控えていた二人の男女に指示を出す

「すいませんが、祭殿、鋼殿その青年を空き部屋に運んでもらえませんか？」

頬に傷のある男、鋼が前に出る

「城の物に見られないようにですか？」

「ええ、無用な混乱は避けたいですから」

「承知した」

鋼は青年を米俵を運ぶように肩に担ぎあげる

孫策の横を通り過ぎる一瞬目が合う

その瞳には主君を諫める厳しい目をしていた

だがすぐに憐れみの色に変わる

鋼は無言のまま城に歩いて行く

「策殿がんばりなされ」

と、祭と呼ばれた成熟した白髪の女性は一声にやにやしなから孫策にかけるとすぐに鋼の後を追いう

間もなく二人の後ろ姿は城の中に消えた

残ったのは孫策と周瑜の二人のみ

「あゝじゃあ俺は馬を戻してくるから」

孫策はそそくさと立ち去ろうとするが

「まあまで」

だが、すぐに止められる

「まだ私の質問に答えて貰って無いぞ、小狼？」

「いや、でも夜も遅いし、こいつも休ませてやらないと」

小狼は周瑜の方を向かずに答える

否、向くことが出来ない

向いたら最後無事に明日の朝を迎えることが出来ない

戦場において幾度となく自分を救ってくれてきた勘がこれでもかと言っくらい警報を鳴らしている

「ならば、安心しろ」

周瑜はそういうと

「明命！」

「はい」

宵闇の中から音もなく一人の少女が現れる

「すまないが、小狼の変わりにその子に戻して来てくれないか」

「わ、分りました」

心なしか明命の声から怯えが感じられる

明命は小狼から手綱をひったくる様に受け取ると逃げる様に馬を連れて駆け去ってしまう

「さて、これで話の続きが出来るな？」

その言葉の裏には他にいいわけは有るかと問いかけている

小狼は逃げ道がないことを悟ると意を決し周瑜の方に振り返る

案の定先ほどと同じように微笑んでいる

その瞬間小狼の運命は決した

「さて、話を聞こうか」

「冥琳さんほどでよろしくお願いします」

その後、青年が目覚めたことを報告に来た祭が見たのは真っ白に燃え尽きた小狼の姿だった

第2話（前書き）

駄文ですが楽しんでいただければ幸いです

第2話

北郷一刀が目覚めると真っ先に目に入っただのは知らない天井だった

そして、未だ覚醒していない頭で周りの様子を見回す

中華風の高そうな木製の机と椅子

枕元にある水差し

そして、この部屋唯一の扉の前を陣取っている頬に傷のあるコスプレをしているとしか思えない男性と目があつた

しばし見つめあう一刀と男性

一刀は瞬きを数回したのち静かに布団を頭までかぶり2度寝を始める

どうやらこれらすべて夢だと思ふことにしたらしい

扉の前に立っていた男性

鋼は若干眉をしかめるも一刀が目覚めたことを小狼に知らせるべく部屋の外で待機している祭を呼ぶのだった

一刀が再び目覚めるとそこには一刀が望んだものではなく自分が夢だと思つた光景が広がっていた

唯一違うところは扉の前を陣取っていた男性がいなくなっただけ

ここに至って一刀は是が夢ではない事を認めた

だが、なぜ自分がここにいるのかが分らなかった

誘拐？

だが、自分を誘拐するメリットがない

自分はいくまでも一般人だ

父と母自分と妹の4人家族

父は中小企業に勤めるごく普通の会社員で

母は家計を助けるために週5日のスーパーのパートで働いている

妹はまだ中学生で時分は普通の高校生

父方の祖父は剣術道場を開いているが門下生は少なく繁盛している
とは言えない

ハッキリいて身代金は期待できない

ならばドッキリか？

そう思い隠しカメラなどを探すがそれらしいものは無く

いくら待てども「ドツキリ大成功!!」のプラカードが来る気配さえない

それどころかコンセントがないことや電化製品の類が一切見当たらないことから電気が通っているかさえ怪しい

なら自分の今の状況は何なのか？

そのヒントを握っているだろう男性に話を聞くしかないと考えているとこの部屋唯一の扉が開く

「お、起きてるな」

「起きていて貰わなければ困るがな」

入ってきたのはさっきの頬に傷のある男性ではない

灰色の髪に蒼穹を思はせるコバルトブルーの瞳、服の上からもわかるがっちりとした肉体、ハリウッドのアクションスターも真つ青な男性

黒い艶やかな髪を膝まで伸ばし先っぽを赤いリボンで止め、確かな知性を感じさせる翡翠色の瞳、グラビアアイドルもはだして逃げ出すような肉体を誇る女性

絵にかいたような美男美女

一刀は部屋の雰囲気も相まってまるで映画の中に紛れ込んでしまったのではないかと錯覚をしてしまいそうになる

「ん？どうかしたか？」

若干呆けたように自分たちを見つめる一刀を心配したのか小狼が声を掛ける

「え？・・・あ！？な、なんでもありません」

「そうか？まあ、とりあえず自己紹介と行こうか。俺の名前は孫策字は伯符。ここ長沙で太守をやってる。んでこっちが」

「周瑜公勤と言う。よろしく頼む」

「え！？孫策に周瑜！？」

「そうだが、私たちの名前がどうかしたか？」

「あ・・・いえ、その、ニックネームとかあだ名とかじゃなくてですか？」

「につくねえむ？ふむ、天地神明に誓って我らは名を偽ってはいないが？」

「えっと、あの、その・・・」

一刀は混乱していた。

ただでさえ、訳のわからない状態だと言うのに目の前の二人は三国志では知る人と知る呉の大都徳周瑜公勤と呉の基盤を作った英雄孫策伯符だと言う

普通だったらよほどの三国志マニアか頭のおかしい人かと思う

だが、一刀の中で納得してしまっている自分もいる

目の前の二人からはなんというか今までに感じたことのない気迫の様なものを常に感じる

「それで、お前の名前は何て言うんだ？」

「ほ、北郷 一刀 と言います」

「北が姓で郷が名一刀が字か？」

「あ、いえ北郷が姓で一刀が名前です。字っていうのは有りません」

「へへ変わった名前してんな」

そう言っつて小狼は一刀に気さくに笑いかけ、冥琳は油断なく一刀の一挙手一投足観察するのだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3435z/>

真・恋姫?無双 ～孫策伝～

2011年12月14日05時54分発行